

22 群盲、象を撫でる話

昔、盲の人たちばかりが住む国に象が一頭、迷いこ
みました。盲の国の人たちは、ドスンドスンという音を
させてやって来たこの象が、どんなものかと不思議に
思い、めいめいてんでに手で触り始めました。

象の鼻を触った若者はこういいました。

「これは、長くて柔らかい。先っぽの方には穴があいて
つながつたゴムホースだろう。」

「いやいや違う。ちょうど丸い柱のようなものだ。それ
も両手で抱えられない位に大きいんだ。」

と別の人が言いました。この人は象の足を触っていたの
です。

「いや、それは違う。これは丸くて平べったい。それが
ゆっくり動いて風を送ってくれる。つまり新式の団扇に
違いない。」

と三人目の人が言いました。それは象の耳を触った人で
した。

尻尾の先を触っていた人は大型の筆だと言いはります。
最後に胴体を触った長老が重々しくこう言いました。

「みんな、何も分っていない。これはな。固くてどこまでもつつ続く壁かへなんじゃよ。」

象はああだこうだと言っている人々を尻目しりめに、再びドスンドスンと大きな音をさせながら、どこかに去っていった。つてしまいました。

